平成14年12月

湯築城だより 2

YUZUKIJO NEWS Vol.2

国史跡指定記念　湯築城跡シンポジウム

愛媛県教育委員会と（財）愛媛県埋蔵文化財調査センターでは、湯築城跡が今年9月20日に国史跡に指定されたことを記念して、10月27日（日）に、松山市立子規記念博物館で、国史跡指定記念「湯築城跡シンポジウム」を開催しました。シンポジウムには、県内外から260人をこえる参加がありました。

国立歴史民俗博物館の小野正敏先生から、全国的な視野からみた湯築城跡の遺跡遺物の評価について、また文献史学の立場から、愛媛県立上浮穴高等学校の山内譲先生に、戦国大名河野氏の評価や海賊衆との関わりについて講演をいただきました。

続いて、コーディネーターに愛媛大学法文学部の下條信行先生を迎え、パネラーとして講師の小野先生、山内先生と道後温泉誇れるまちづくり推進協議会の奥村武久会長に参加をいただき、パネルディスカッションを行いました。湯築城跡の遺跡の学術的な価値と魅力を再発見するとともに、今後の活用や課題などについて熱心に議論されました。

シンポジウム当日の午前中には、湯築城資料館展示説明会と、湯築城跡発掘調査の成果報告会が行われ、多数の参加がありました。

展示説明会では、ボランティアガイドが各展示施設と復元区域の説明や案内を行いました。続いて、松山市立子規記念博物館において、調査担当者が11年間に及ぶ発掘調査状況の説明やこれまでの調査成果について報告を行いました。

シンポジウム会場の様子

講師・パネラー

小野（おの）　正敏（まさとし）　国立歴史民俗博物館助教授

湯築城跡の研究、整備指導

編・著書　「戦国期の館（やかた）、屋敷（やしき）の空間構造とその意識」『信濃』第46巻　3号　1994

『戦国城下町の考古学』講談社　1997

『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版社　2001

講師・パネラー

山内（やまうち）　譲（ゆずる）　愛媛県立上浮穴高等学校教頭

湯築城跡の発掘調査現地指導

編・著書　『中世伊予の領主と城郭（じょうかく）』青葉図書　1989

『海賊と海城（うみじろ）』平凡社　1997

『中世瀬戸内海地域史の研究』法政大学出版局　1998

コーディネーター

下條（しもじょう）　信行（のぶゆき）　愛媛大学法文学部教授

道後公園整備計画検討委員会委員

（史跡・考古学）

編・著書　『弥生農村の誕生・古代史復元④』講談社　1989

『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』1998

パネラー（地元代表者）

奥村（おくむら）　武久（たけひさ）　道後温泉誇れるまちづくり推進協議会会長

道後公園整備計画検討委員会委員

大和屋本店旅館代表取締役社長

講演「湯築城と戦国時代城館の発掘」の要旨

国立歴史民俗博物館助教授　小野　正敏

湯築城に関する重要な問題は、湯築城跡がもっている全国的な意味での位置づけ、城あるいは都市としての位置づけがどうなるのかということであろう。

以前、湯築城について空間をどのように理解するか、出土品から何を考えるかについて話をした。その内容は（財）愛媛県文化振興財団の『文化愛媛』（No.45、2000年）にまとめているので、今回話し足りない部分はこれを読んでいただきたい。

まず、16世紀、戦国時代における大名の本拠の特徴について考えてみたい。守護クラスの大名の本拠を大きく分類すると、二つの型に分かれる。

一つは、城郭型であり、戦国大名らしい、城や戦うという機能を前面に押し出した城下町である。福井県の一乗谷朝倉氏遺跡は、朝倉氏の本拠としてできた都市であり、現在まで40年近く調査が継続して行われている。一乗谷の中に、大名の館があり、武士屋敷があり、都市の出入り口を守る城戸があり、町屋や職人などたくさんの町を支えた都市住民が集住している状況が発掘されている。景観的には、狭い谷の中にあって山の上に城をもち、その下に政治の中心である館がある。そして、館は土塁や堀で囲まれ、町は城戸で閉ざし防御されている。

これに対して都市型あるいは都型といえるのが、大分市の豊後府内町と大友館である。それは、流通のセンターとしての都市性、スタイル的には京の都をそのまま模倣したような都市を表現している。町全体が方眼の都市計画で示され、その中に館が寺院とセットとなって都市の中核を占めている。大友館は、方形に街路によって区画された中にあり、道路に面しており築地塀をめぐらせている。これより外の街区には多くの町屋があり、商人や職人の家々が街路に沿ってたくさん発見されている。何の防御ももたない大友の館があり、まわりには町屋があり、寺院やキリシタンの教会があり、それが港を伴って展開している町といえ、流通を担う交易都市としての性格が強く出ている。

大名の館は、第一に大名が生活のために住むという機能があるが、それよりも政治の場、儀式・儀礼の場という機能が集中している屋敷であったということがその景観を特徴付ける。館の空間的な特徴をみてみると、100m～150m、大きいものになると200m四方という区画を取り、四角い館をつくる。また、その中の特徴が非常に良く似ており、南側半分に庭園をもち、それに面した建物がつくられる。そこには、洛中洛外図屏風に描かれた将軍邸と細川邸の構造と酷似しており、ある一定の権威を持つ人たちはこういう屋敷に住むべしというモデルが存在したようで、また一方で、屋根の葺き方が、将軍邸では桧皮葺であり細川管領邸では板葺きであるというような格式の差が表現されるのがこうした屋敷なのである。山口市の大内氏館は従来から知られるが、四国の最近の発掘調査例として徳島の勝瑞館がある。勝瑞館は、畿内と密接な関係がある三好氏の本拠ということになっている。大きな堀がほぼ四角にめぐっており、方形の館になることがわかってきている。全体の様子はまだ明らかではないが、会所と庭園部分が発掘されており、館の南半には、庭園に面して会所があるという館の共通性がみられる。

こうした館の空間の特徴をさらにこまかくみると、ハレ（非日常）とケ（日常）の使い分けがあり、家のものが日常使う空間がケ、客が来て宴会、儀式・儀礼をする空間をハレとしていた。大きくはハレの空間が南に、ケの空間が北に広がっている。ハレの空間を象徴する建物は、武家儀礼や儀式をおこなう主殿と、連歌やお茶など文芸・遊興的な集まりのために使われる会所であった。

また、大名クラスの館では屋敷の空間構成が似ているだけでなく、人をもてなしたり部屋を飾ったりする「しつらい」に使う陶磁器類に共通性がある。これを威信財、ステイタスシンボルともいうが、これら陶磁器の全国での出土状況をみてみたい。表は、15世紀前半代～16世紀後半までの全国の発掘でよくわかっている遺跡をあげているが、一乗谷朝倉館（越前）、武田

城館における陶磁器（威信財）の出土状況

	白磁梅瓶・四耳壺	青磁盤	青磁酒海壺	青磁花生	青磁太鼓胴盤	青磁器台	天目茶碗・茶入	元代染付	その他	庭園
勝山館		○		○			○			?
浪岡城	○	○	○			○	○		陶枕	■
根城	○	○	○	○			○		馬上杯、玉壺春	■
至徳寺	○	○	○	○		○	○	○玉壺春	釉裏紅玉壺春、碗	
高梨館		○	○	○	○	○			耳かわらけ多い	○
朝倉館		○	○	○	○	○	○	○酒海壺、盤	高麗青磁陶枕、定窯白磁鉢	○
本佐倉城	○	○	○	○			○			
武田館	○	○	○		○		○	○酒海壺	宋胡録香合	○
八王子城	○	○	○	○		○	○		ベネチアングラス	○
祇園城	○	○		○			○		浮牡丹大香炉	
湯築城	○	○	○	○	○		○		高麗青磁瓶子	○
江上館	○	○	○	○		○	○			■
尾崎城	○	○	○	○	○	○	○	○皿	馬上杯、朝顔型天目	■
江馬館	○	○		○			○		高麗青磁碗	○

（シンポジウム資料より転載）

館（甲府）、八王子城（武蔵）、湯築城をとくに注目していただきたい。上の欄には、キーワードとなる焼き物の種類をあげている。白磁梅瓶・四耳壺、青磁盤、酒海壺、花生、天目茶碗・茶入は大体どこでももっている。湯築城では、全国の大名クラスのもつ標準品は大体もっており、さらに高麗青磁瓶子という、朝鮮半島で焼かれた陶磁器がある。高麗青磁は、朝倉館や江馬館（飛騨）など、かなり限定されたところだけがもっている特別な品である。高麗青磁は12・13世紀頃の焼き物で、戦国時代にも骨董品として扱われており、河野氏は鎌倉時代頃の非常に良い焼き物、数百年ほど前の陶磁器をもっていたということになる。これらが使われるのは庭園に面した会所という場所で、客を迎えたときに威信財で飾り立てて接待するということが行われた。

また、かわらけという儀式宴会に必ず使う道具がある。これは、素焼きで、一度使うと汚れてしまう、逆にいうと一度使うと洗って使わない焼き物で、宴会、儀式のたびに大量に消費し捨てられた。つまり、かわらけを捨てた土器だまりをもっているということは、宴会や儀式をする人がそこに住んでいたことを示している。一乗谷では、館の出土遺物の中でかわらけは9割を占めるほどで、かわらけをたくさん使うことが権威の象徴でもあった。湯築城の場合、かわらけの出土は庭園区、家臣団居住区、丘陵部の斜面で確認されている。かわらけはろくろを使って作り、最後に糸で切り離すため、裏に糸きりの跡が残る。湯築城では、ろくろを使ったかわらけがほとんどであるが、京の都ではろくろを使わずに、「てづくね」で作られていた。大内館、大友館、勝瑞館では、地方のろくろを使ったかわらけから京都風のかわらけへと、ある時期転換するようになる。京都風のかわらけを使う方がより文化的には中央に近く、地方のかわらけか、京都風のかわらけかでランク差がでてくる。そのような中で、河野氏の湯築城では、地方のかわらけが使われ続けるのである。勝瑞館と比較すると、その差が明瞭である。

湯築城のもう一つの特徴として、大分市豊後府内の大友館と共通して、東南アジアや華南三彩などの中国南部の陶磁器が多い点がある。豊後府内は、琉球やさらに南との流通センターともいえる国際港であり、湯築城でも威信財として南の文物が多く使われていたことは注目される。

最後に、湯築城という城の位置づけをどのようにとらえるか、それは城郭型でも都型でもない。以前は、守護所スタイルの四角い館の変形と考えていたが、むしろ湯築城には、都型の規範性を取り入れる部分と、それを取り入れるがその土地がもつ聖地性という特別な価値を活かした城郭造りが重なった結果の表現となっているのではないか。都型であるかないかの二者択一ではなく、そこに地域の特性、歴史性が活かされた形をとったことで他に例をみない独特の城が造られたと考えられる。

ここ数十年来、史跡のもつ意味が変わってきた。昔のようにそのまま土の中に残せばいいという保存だけの指定から、保存し調査して歴史を語らせる整備へと、大きな転換が行われていると思う。

講演「戦国時代の河野氏と湯築城」の要旨

愛媛県立上浮穴高等学校教頭　山内　譲

河野氏とはどのような一族かというと、中世という400年を一貫して生き抜いた一族であるといえる。そのような一族の例は少なく、薩摩の島津氏、安芸の毛利氏、豊後の大友氏、甲斐の武田氏など少数の例が挙げられるに過ぎない。しかも、河野氏はただ生き抜いただけではなく、その間の日本史を変えるような大事件、源平の合戦、承久の変、元寇、南北朝の動乱、応仁の乱など全てに何らかの関わりをもっている。

しかし、河野氏の全国的な知名度は今ひとつであり、戦国の大名としてはメジャーではないのも事実である。その大きな原因は、戦国末に滅亡したために、膨大にあったはずの河野家伝来の文書が散逸してしまったためと考えられ、今後は考古学の成果と一体となった研究を進める必要がある。

河野氏はなぜ滅亡したのだろうか。答えは難しいが、戦国大名としての性格と関わりがあるのではないだろうか。戦国大名には多くのタイプがあるが、どのように戦国大名になったかという視点で考えると、三つのタイプに分かれる。有名な戦国大名を例にとると、一つは武田信玄型、二つ目は上杉謙信型、三つ目は 毛利元就型である。この中で河野氏は、武田信玄型に該当する。このタイプは、室町時代の守護がそのまま戦国大名になったもので、上杉謙信型は京都にいた守護の代わりに国を守っていた守護代が国を支配したタイプ、毛利元就型は国人が戦国大名になったタイプである。 下克上で権力の座に就いた上杉謙信や毛利元就は、その過程で強い権力を築き上げた。ところが、河野氏のように守護大名がそのまま戦国大名になると、あまり強大な権力とならない傾向がある。一族の内部で下克上をやって強力な権力を築いた武田氏は例外的で、河野氏には内紛があったが、権力の強化につながらず、弱体化につながった。また、このタイプは室町幕府との関係が切れず、幕府の権威に依存する傾向があり、河野氏にも室町幕府との付き合いを示す資料が多くある。

このように、河野氏は、戦国大名への脱皮がうまくできず、強力な権力を作り上げられなかった。また幕府の権威にすがり、時代の変化に対応できなかった、この辺が滅亡の原因と考えられる。

次に、湯築城跡から出土したグレードの高い多様な陶磁器に注目して、誰がどのように運んだのかを考えると、まず思い浮かぶのは伊予国の戦国時代の歴史には欠かせない海賊衆、水軍の存在である。日本の歴史上の海賊は、多様な活動をした存在であり、「水軍」という軍隊を示す言葉ではその多様性が示せないため、ここでは、海の領主、海で生活する人々という意味で、「海賊」という言葉を使用する。

では、海賊衆が陶磁器を運んだといえるのかというと、明確な証拠はない。しかし、状況証拠といえる資料をいくつか挙げることは可能である。

史料１は、海賊村上（来島）通康が書いた手紙で、布教のため伊予に来ていた高野山の僧に対して、近々来島村上氏が堺に出す船に乗って帰ることを勧めている。堺は、無論当時の国際貿易港であり、来島村上氏はそこに船を頻繁に出していたと推定できる。つまり、堺で陶磁器を手に入れることは可能であったと考えられる。

次に、中世瀬戸内海の重要な港についてみると、塩飽、笠岡、鞆、上関などは、いずれも海賊である村上氏が関わりをもった港である。例えば塩飽は備讃瀬戸の最も重要な港であり、

能島村上氏が税を取っていたことが文献で確認できる。また上関、鞆も重要な港であり能島村上氏や因島村上氏が支配した。このほか、防府の西の秋穂という港も良港であり、能島村上氏が毛利氏と折衝をして手に入れている。このように海賊衆は瀬戸内海の重要な港を多く支配下においたため、陶磁器を入手することはたやすくできたであろう。

また、能島村上氏の本拠である能島の近くにある見近島城跡が発掘調査され、おびただしい量の陶磁器が出土した。これらは商品の可能性があり、倉庫などが見近島にあったのではないかとも考えられる。そうであれば能島村上氏自体が商業活動をしていた可能性も指摘できる。

以上はいずれも状況証拠で、海賊衆が陶磁器を運んだのかどうかは、今後の課題である。陶磁器の輸送に関して明確にいえるのは、商船が大きな役割を果たしていたということである。瀬戸内海の商船の活動を示す良好な資料として「兵庫北関入船納帳」があり、文安2（1445）年に兵庫北関に入った船のデータが網羅されている。その中で伊部の商船が、25回にわたり大小の壺をたくさん積んで北関に入っていることが確認できる。伊部は現在の備前市にあたり、壺は備前焼と考えられる。この伊部籍の船は活発に瀬戸内海を行き来していたとみられ、このような商船によって港に運び込まれた商品が、湯築城に入った可能性が高い。どの港に入ったのかはパネルディスカッションで言及したい。

最後に、中世の道後は城下町であるということを確認しておきたい。しかもそれは非常に奇妙な城下町である。湯築城も謎が多いが、城下町としての道後にも謎が多い。城下町に温泉が同居している点が奇妙である。温泉は、敵も味方もない平和領域であり、世俗の世界と縁の切れる場所、非政治的な場所であった。城下町は政治的な領域であり、このような同居はあまり例がない。この二つがどのように共存していたのか研究する必要がある。河野氏は温泉を大切にしたとみられ、それが、今に残る貴重な文化財である湯釜や、史料2の永禄5（1562）年、河野通宣（左京大夫）が道後温泉への入り方を定めた制札などに示されている。

［史料1］ 村上通康書状　切紙　〔高野山上藏院文書〕

尚々彼舟ハ（堺）まて直々罷上候間、同道めされ候て可然存候

一筆令申候、仍此時分御帰山候哉、然者□船爰元罷下候迄中途より借候て、御祝言之御座船に被仕立候、彼船廿日比過候ハ、可罷上候間、御乗船候て可然之由候、たしかなる舟之事候間、申少輔□被申付上乗等まて堅固候之条、於御上者彼船ニ御乗候様ニ内々御支度干要候、某より内茂可申由候間、以書状申候、くハしく御返事ニ可蒙仰候、恐々謹言

六月十五日　通康（花押）

高音寺

御同宿中

［史料2］ 道後温泉制札（墨書）〔石手寺〕

一毎月五日十日十五日廿日廿五日晦日者、石手一山中為入浴之条、其外之留湯一切可停止者也

右背此掟族見（カ）相、可處罪科之旨如件

永禄五年十二月廿一日（花押）

［河野氏略系図］（----は推定）

教通――通宣――通直------

（通直）（刑部大輔）（弾正少弼）

晴通----通宣----通直

（左京大夫）（牛福丸）

（シンポジウム資料より転載）

パネルディスカッションの発言要旨

下條　次の三つのテーマに沿って話を進めたい。一つ目は、湯築城の築城から廃城までの変遷、二つ目は、豊富で質の高い輸入陶磁器をどうしてもち得たのかという点、三つ目は、整備され、国史跡となった湯築城跡の活用についてである。

地元代表として、奥村氏に口火を切ってもらいたい。

奥村　松山城築城400年祭に当たる今年、偶然にも松山城の前の250年間伊予の中心であった湯築城跡が復元オープンし、国史跡となった。中世・近世の城が近くにあり、温泉もあるというのは全国的にも例がない。

湯築城跡は、大勢でいろんな議論をして復元・整備ができたことが評価できる。「再発見！湯築城跡の価値と魅力」というシンポジウムのタイトルだが、価値がわかる人には魅力がわかる。観光客はまだ少ないかもしれないが、この公園が松山市の価値を非常に高めていて、道後の魅力アップにも役立っている。学問的にも、観光資源としても、市民にとっても価値があり、地域としても、ここを取り入れたまちづくりに取り組んでいきたい。

湯築城の変遷について

下條　湯築城の変遷の概略を図示しておいたが、１段階（14世紀前半から中頃）に「湯築城」という言葉が文献に登場する。この時期の「湯築城」はどのようなものか。

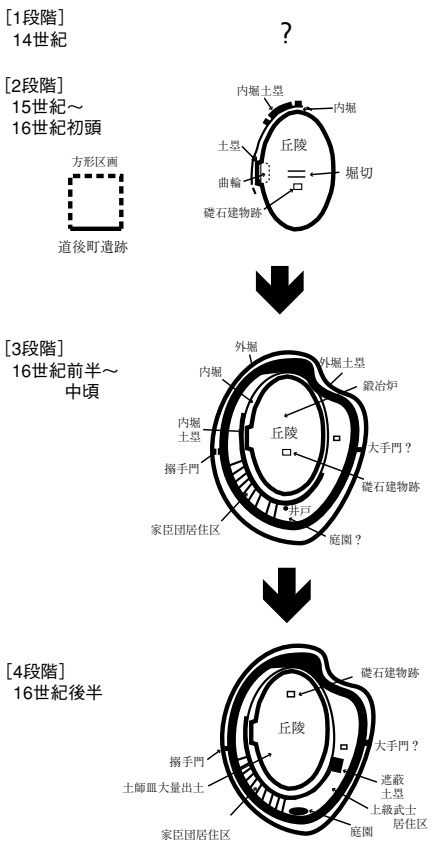
山内　この言葉は忽那家文書に書かれており、この時点では「湯築城」が存在したということで、築城を意味するものではない。また南北朝期の城としては丘陵が低いが、湯築城という名がついている限り、場所はここでよい。

下條　発掘調査では、14世紀までさかのぼる遺構はなかなか見つからない。南北朝期の城はどのようなものだったのか。

小野　「城」とつくからといって、戦国期の城をイメージすることは問題だ。13・14世紀代と15世紀中頃以降の城では、かなりイメージが違う。13・14世紀代の城は戦闘状態などのような特別な時だけ城として使う、または普通の館や屋敷が防御施設を施して城に変化する。湯築城の場合も、14世紀に文字資料があるからといって、ここに城が常時あったとはいえない。今後の課題として認識しておく必要がある。

下條　２段階（15世紀～16世紀初頭）には、丘陵上には堀切や礎石建物があり、生活空間として活用されている。丘陵裾の西側には曲輪、北には堀と土塁があり、土塁は外土塁である。また城の外側（西）で道路の調査により発見された一町四方の方形区画も含めて考えるべきであろう。３段階（16世紀前半～中頃）では、外堀ができ、構造が明確になる。この段階では、文献面から何がいえるのか。

山内　天文４（1535）年、「温付堀」の普請に対して、人足を要請する文書（国分寺文書・仙遊寺文書）の「温付堀」が湯築城の堀であることを川岡



湯築城の変遷概念図
（シンポジウム資料より転載・一部加筆）

勉氏（愛媛大学）が証明した。この時期に外堀が築造されたと考えられ、発掘の成果とも一致している。

下條　この段階で丘陵部と周辺部が完成し、家臣団居住区ができた。城の外側にあった方形区画はなくなったようだが、その機能が湯築城内部に取り入れられたかどうかは現段階では不明だ。

　４段階（16世紀後半）は、遺構から全体の空間を考えることができる。遺物組成は丘陵部だけ平地部と違い、供膳具（きょうぜんぐ）が圧倒的に多いが、これをどう考えればよいか。

小野　土器や陶磁器の状況が空間の使われ方の違いを示す。素焼きの土器かわらけが、丘陵の斜面に多く捨てられ、比率（ひりつ）が98パーセントを占めるのは異常だ。かわらけは、儀式や宴会等に使われるものであり、もとは伊佐爾波（いさにわ）の丘がここにあったという伝承とも関連があるのではないか。城を築く場所を選定する際に土地の意味を重んじることを考え合わせれば、丘陵は宗教空間の可能性もある。平地の部分は生活空間として位置づけられる。また威信財である高級陶磁器の存在も重要だ。通常の碗皿と違い、青磁の花生、中国製の天目茶碗を１個もっているのともたないのでは大きな違いがある。上級武士居住区とそのほかでは威信財の質･量が違う。

下條　関連して、土器だまりの大きさ、土器の質なども家臣と上級では違いが認められる。このような空間の使われ方の違いはこの段階か、あるいはその前に発生したと考えられる。

●陶磁器の流通について

下條　陶磁器の評価について、再度お願いしたい。

小野　（４ページの）陶磁器の出土状況表をじっくり見ると、湯築城が、現在掘られている城館遺跡の中で、陶磁器ではどこと肩を並べているのかがわかる。また、東南アジアの陶磁器がこんなに入っているところは珍しい。ほかの館では出土せず、堺などの港町、つまり商品が集散する場所で出土するコンテナ（容器）として利用された陶磁器も湯築城では確認できる。湯築城について積極的に、港の問題とからめて考えてもおもしろい。

下條　湯築城では、誰の活躍（かつやく）によってこれらの陶磁器を所有することが可能となったのか。

山内　海賊衆が陶磁器の輸送に関与したことを明確に示す文献を今後探したい。また講演の補足をすると、湯築城の港は三津と堀江であり、これと湯築城をからめて、湯築城トライアングルとして考えていきたい。

下條　陶磁器については、見近島城跡が湯築城と類似した傾向であり、16世紀中頃までのものが多く入っている。海賊衆の全体の趨勢（すうせい）と湯築城は同じ傾向にあり、流通・物流は海賊衆の動向も含めて考えるべきということはいえそうだ。

　以上のようにまだまだ詰めきれないことが多くある。湯築城そのものをもっと明らかにすることは当然だが、しまなみ地域まで含めて、総合的に考えていかなければならないだろう。

●湯築城跡の活用について

下條　最後に、活用についてそれぞれ一言お願いしたい。

奥村　現状ではわからないことが多いならば、湯築城全体を発掘して欲しい。観光利用にあたって茶店くらいはおいて欲しいが、観光は結果であり、価値あるものが観光となるので、観光客に迎合する必要はない。専門の先生方で、これからの活用も論じて欲しい。地域住民、ビジター、専門家の三者が満足する本物志向で、全国に誇れるものをつくって欲しい。

山内　どう活かすのかを、研究する者の立場から考えている。河野氏出身の一遍上人（いっぺんしょうにん）は有名であり、旅を修業の場としたという点では四国遍路（へんろ）の先駆けともいえる。一遍と関連付けながら河野氏について考えるということも大事ではないだろうか。

小野　古くから温泉があり、人が集まる場所であった道後の地、それだからこそ湯築城もここにできたともいえる。土地と有機的に結びついて、全国に情報を発信した。そうした遺跡を意識して時間をかけた調査をして、本物志向の人が満足する歴史を発信する地域となって欲しい。

●出土遺物　ミニギャラリー

高麗青磁瓶子

湯築城跡の上級武士居住区から高麗青磁が出土しています。瓶子という、小さな口がつき、肩が丸く腰にかけてすぼんだ形の壺の底部の破片です。裾の部分に、象嵌（＊）という方法で、雷文（＊）をめぐらせています。この陶磁器には、三つの点で特別な意味があります。

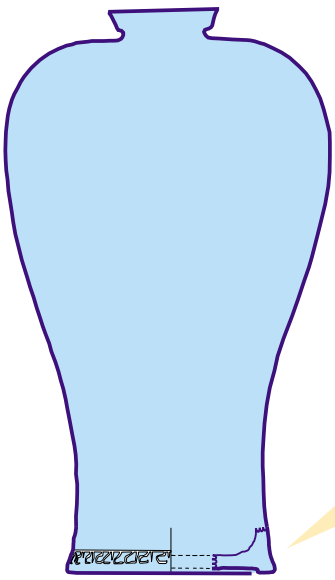
まず第一点は、高麗青磁そのものが希少であったことです。外国から輸入された陶磁器の多くは、中国からの輸入品で、朝鮮半島や東南アジアの陶磁器は少数です。その中でも高麗青磁は、「翡色」と呼ばれた美しい淡青緑色が好まれ、特別に貴重な陶磁器でした。

第二点は、瓶子という器形です。湯築城跡から出土するほとんどの輸入陶磁器は碗や皿などの食器類で、城内では日常の生活において使用されていたものです。それに対して瓶子は、盤（大きな皿）や酒海壺（蓋付の大型の壺）などと共に、酒宴などの席で使用されたり、部屋に飾られたりと、晴れがましい場で使用された特別な器といえます。

第三点は、生産された時期です。高麗青磁の生産年代はまだ不明な点が多いのですが、湯築城跡出土のものは、13世紀代前後のものと考えられます。実際に使用されていたのは16世紀後半ですから、当時においても300年も古い骨董品ということになります。

以上のような点から、高麗青磁瓶子は非常に価値が高く、大変貴重な焼き物であったといえます。戦国時代の遺跡からの出土例は少なく、河野氏の権勢を示しているのと同時に、これが出土した上級武士居住区が非常に地位の高い人の暮らした場所であることを示唆しています。

＊ 象嵌・・・生地に文様を彫り、白土などを埋め込んで、文様を表現したもの。
＊ 雷文・・・方形や円形の渦文を並べた文様



瓶子の形

出土した高麗青磁

●中世を知ろう!

平成14年９月20日付け（官報）で、湯築城跡が国史跡に指定され、愛媛県内の中世遺跡としては能島城跡（宮窪町）、河後森城跡（松野町）に続き３例目の指定となりました。

□能島城跡

能島城跡は、芸予諸島に浮かぶ能島とその南にある鯛崎島とからなり、小さな島全体を城郭化して海を縄張に取り込んだ海城です。天正16年（1588）海賊禁止令が出されて勢力を失うまで、中世には、芸予諸島海域を中心に三島村上氏（能島・来島・因島）が海賊衆として活躍しており、能島城は、能島村上氏の本拠地として知られています。

不整形な三角形の島の中心部を削平していくつかの曲輪がつくられており、島をとりまく岩礁には多数のピット（柱穴）がみられます。この岩礁ピットとよばれる海城特有の遺構については、近隣の来島城跡（今治市）、甘崎城跡（上浦町）において調査が行われ、海岸線に直交した「縦列岩礁ピット」は繋船施設と考えられています。

能島城跡は、史跡公園整備に向けて平成13年度から調査が行われています。しまなみ地域に広がる海城の本格的な調査は近年はじめられたばかりで、今後の調査によって、海城の構造や海賊衆の実態がみえてくるのではないかと思われます。

□河後森城跡

河後森城跡は、広見川、鰯川、堀切川という３本の川に囲まれた独立丘陵上に位置する中世山城です。伊予と土佐の国境に位置する城として重視され、戦国期には河原淵（渡邊）教忠という城主の存在が知られており、たびたび土佐方勢力の侵攻を受けたといわれます。豊臣秀吉による四国平定ののちは小早川氏、戸田氏、藤堂氏、冨田氏に支配され、1615年の一国一城令により廃城となったと考えられています。

丘陵中央の本郭を起点として、尾根筋を階段状に削平して約20にもおよぶ曲輪がつくられ、その曲輪が東西に馬蹄形にのびるという大変特徴的な構造をしています。平成３年度から、本格的な発掘調査が行われており、中世の「土づくりの城」ともいわれる山城の構造が分かってきました。土を掘り盛って作った堀切、竪堀、土塁などの城の防御に関わる施設が確認されています。また、曲輪では小屋や櫓の機能が想定できる掘立柱建物や礎石建物跡が見つかり、出土した遺物からは城の生活に関わるものが多く見つかっています。

現在は、保存と活用を目的とした環境整備が行われており、継続的に調査研究が進められています。

《愛媛県内の国指定史跡》

	名　称	遺跡の時代	所在地	指定年月日
1	伊予国分寺塔跡	古代	今治市国分	大正10年３月３日
2	宇和島城	近世	宇和島市丸之内	昭和12年12月21日
3	法安寺跡	古代	周桑郡小松町北川	昭和19年３月７日
4	松山城跡	近世	松山市堀之内ほか	昭和27年３月29日
5	能島城跡	中世	越智郡宮窪町宮窪	昭和28年３月31日
6	上黒岩岩陰遺跡	縄文	上浮穴郡美川村上黒岩	昭和46年５月27日
7	来住廃寺跡	古代	松山市来住町	昭和54年４月21日
8	河後森城跡	中世	北宇和郡松野町松丸ほか	平成９年９月11日
9	湯築城跡	中世	松山市道後公園	平成14年９月20日

夏のイベント「発見！中世のくらしとその道具　～絵巻物をつくろう～」

８月25日(日)、湯築城資料館夏のイベント「発見！中世のくらしとその道具　～絵巻物をつくろう～」を開催しました。小・中学生の親子12組の参加があり、中世の道具について知ろうというテーマで湯築城資料館の展示見学を行いました。

参加者は、はじめに資料館や武家屋敷で、湯築城跡の発掘調査で実際に出てきた陶磁器やすり鉢、石臼などの中世の道具を、ボランティアガイドの説明を受けながら観察しました。また、展示を見て中世の道具を知ったあと、資料館では、実際に出土した中国陶磁器や土器の皿をさわり、連歌の様子が再現されている武家屋敷１の中では、親子で連歌を１句詠み合わせるなど、中世の物に触れ、その時代のくらしを体験しました。武家屋敷２では、現在古い民家に残っていた石臼で粉ひきの体験をしました。伊予の粉ひき唄を地元の民謡同好会の皆さんに演奏してもらう中で、ボランティアガイドに教わりながら親子で石臼をまわし、石臼から粉が出る仕組みを知りました。親子ともに、石臼ひきは初めてで、大変粉ひきに熱中されていました。

最後に、観察した中世の道具の絵や連歌を書いたカードを巻紙に貼りあわせ、千代紙や和紙を使って色鮮やかな「中世道具絵巻」が12巻完成しました。

参加者からは、「いろいろな経験ができてよかった」、「夏休みの宿題になった」と言う声が多く聞かれ、大変好評でした。

道後薪能

９月５日(木）には、松山城築城400年と道後公園（湯築城跡）の開園を記念して、道後薪能が行われました。明治期、道後公園内に建てられた衆楽館や、その後の道後公会堂でも、たびたび能が演じられていた記録があり、古くより道後地域で盛んであった能が湯築城跡の上級武士居住区を使って、再現されました。

この日は、夕方６時30分より開演され、仕舞と狂言のあと、愛媛県知事と松山市長による火入れ式が行われ、能が演じられました。

1800人もの観衆は、中世にも行われていた能楽の幽玄な世界を堪能していました。

●ボランティアガイドの声

夏のイベント参加のボランティアガイド（男性・60代）より

夏のイベントでは子供達の石臼ひきの体験があり、それにあわせて粉ひき唄を演奏しました。日頃から、地方に残る民謡について興味を持っており、その中から菊間町に残る伊予の粉ひき唄を披露（ひろう）しました。

参加の子供やその親の世代も、石臼をひくのは初めてとあって、ひいた「きな粉」はずいぶん目の粗いものでありましたが、石臼は粉ひき唄のリズムにあわせて、ゆっくりとひくものだということを知っていただいたのではないかと思います。

＜菊間町に残る伊予の粉ひき唄＞

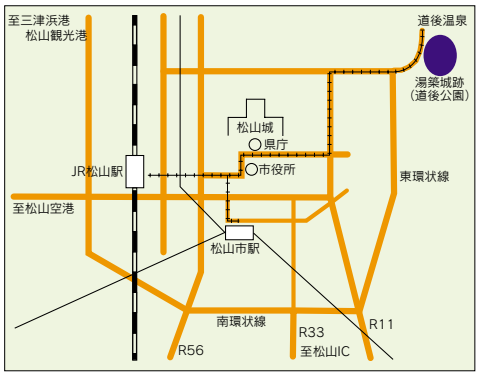
一、臼をひくときゃ　眠り目でひくが　団子食うときゃ　猿まなこ
二、寝たいねむたい　この夏土用に　小麦ひけとは　どなたやら
三、小麦ひけとは　旦那のからじゃ　うどんあがると　いうたから
（以下六番まで）

●湯築城の自然ひとコマ●

湯築城の丘陵南東に、城内で最も美しい見事な岩の景観があります。

湯築城の丘陵は、地質的には南側が和泉層群（いずみそうぐん）で、北側は領家花崗岩類（りょうけかこうがんるい）に分かれています。露頭（ろとう）している岩は、和泉層群の礫岩（れきがん）で、全く自然に形成された景観です。

当時の武士たちも、この景観を庭園に見立てて、宴会などを催（もよお）していたかもしれません。



＜＜利用案内＞＞

○公園
常時開園（24時間OPEN）　入園料無料
○展示施設
入館料無料　9時～17時
休館日/毎週月曜日（休日の時は翌日）12月29日～1月3日

■編集後記

オープン後約半年が過ぎ、最近では県内だけでなく県外からの見学も増えてきています。今秋には、湯築城跡が国史跡となり、記念シンポジウムではその価値も見直されました。今後、さらに調査研究を進めるとともに、広くその情報を発信していきたいと思います。（M）

湯築城だより　2号

編集・発行　湯築城資料館
〒790-0857
愛媛県松山市道後公園
TEL　089-941-1480
FAX　089-941-1481